

利門
1285
1

戯つはぎふに藝ぎ衣ぎを。雅みやび又またれこれにぎあまらまらまぶぶ弊へいととももああららばば。ささららああららばば。
色いろ線せんににああららばば。彩いろどの
條じょうああららばば。ししとともも同どうじじである
布ぬいしももああららばば。ししとともも保たもつつまま。
孔あな交まじりりのの白しろ。当あた染せんををああららばば。拵しらべはは。
端たん拵しらべののももああららばば。小こ裁ざいにに短たん文ぶん。数かず十じゅうを



何れも。正統を為海所の市に也
と傳ふをばいふは。いふもはら

紫花樹總名

芍藥亭文集初編目錄

○ 賦

石賦

○ 說

地震說

○ 箴

鰥夫箴

○ 文

三絃塚勸進文

祭茨木之腕文

龍宮城花街新海原賦

美人箴

雪日贈友人文

○序

集知己書屏風序

狂歌卅六題集序

新續狂歌東西集序

五手船序

班竹集序

春興帖序

菊葉序

藤川百首題狂歌集序

續狂歌東西集序

關東百題集序

賞月狂歌會序

百花帖序

書畫帖序

○後序

盆畫指南抄後序

漢楚狂歌合後序

五十人十首後序

○送人序

送狂歌堂行駿河序

送卧龍園上京序

○贊

異國美人彈琴贊

四睡贊

賣茶翁像贊

芭蕉翁贊

黑木賣贊

狐拳贊

鯨魚贊

蛙贊

○辭

贈鳳鳴閣龍吟閣辭

贈武隈菴柳栄子辭

贈檜園辭

贈賣茶園辭

贈五子辭

贈狂歌堂小祥忌辭

贈鈍々亭大祥忌辞

悼西来居辞

○碑

後平秋庵東作碑

尾上梅幸碑

○記

遊十樂亭記

目錄終

附言

- 一 文章ハ讀よて不ま潔きとしてして故は語勢ごせいの緩急くわんきふよりして音訓おんくんとしてしる
- 一 字義じぎ不ま泥ぢとして俗字ぞくじと用もちるも戯文ぎぶんの常つねにし蚪たうと赤貝あかゑいとして青苔あおこけとしてしる
- 一 烏くろ芋うづと思おも慈姑じことして白しろ未み醬じやうと對たいせしるも一つ
- 一 法師ほうしと帝てい時じ人にんの三字さんじと填まるも人の皮かわはし橋はしはしの二字にじと填まるもかめきと對たいせしるも一つ
- 一 訓義くんぎ不ま潔きとしてしるも蜃樓しんろうとしてしるものりのりとしてしるも訓くんてしるも龍燈りゆうとうと對たいせしるも一つ蟬せみ鬢みづらひとしてしるも一つ
- 一 戯文ぎぶんはしあらぬも二三にさん篇へんあらぬも一つ此集このしふの本ほん色いろはしあらぬもふれももも新助しんすけとしてしるも一つ

一勅和歌辭、夜發詩、雪詩、喜捨法師贊、大原女贊、王昭君贊、猿文、贊、朝妻
舟贊、數篇、芍藥亭歌集、廣陵集、其中收た、い、く、く、不載、其餘、
二篇、載て、梓行、近き、あり

芍藥亭文集

石賦

全篇不出石字

芍藥亭長根



天地の大戲場なり、萬物皆小戲場なり、こゝは、ま、ま、砂よりなれた
一の戲場あり、土を以て座元と、玉を以てたてり、のとも、大なるといふ、
臺の三百も大なる、又非小といふ、切飯の一粒も小、又非をハ必、
起り、能ハ切落、又潜む、神仙ハ食て、さ、さ、の、さ、ま、れ、なり、高、
坐して、能身、板、の、閑、と、さ、む、
取の一言と罵、臭、腹、浦、れ、繩、張、り、
病と治、鐵と吸、劍と磨、衣と搦、
造化の役割と、人物の本の、
合せて、
彫て、
刻て、
佛と、
道具、
立、
美と、

山川を分血中は藏陣勢を盤上は布き功を誌て子載は付へ銘を撰て来夫と論ハ化者ハ腸とあるは天を捕ひ天より兩ハ越向のふきとやいそん人ハ後ハ人の化ハ信ハれあたるしきとやいそん大仕掛の突殿ハ播州ハ鳴り雜子方ハ鼓ハ鳴門ハ響く番ハ入まて山を下ハ魂魄の細索をつたがめく燕となりて洞を出ハ橋はれ幕中ハ飛がめく亀戸の龜ハあは合れ世界ハ用べく駒高の馬ハ稻荷町の名代ハキム一江の蛙ハ貝売ハ身声色を行て不鳴大原の獅ハ足音ハ分松子とふ行て跳る神軍の鉄ハ揚障子の内ハ研霹靂礎ハお出れ後ハ搜る実悪の糸平内湍散乃上下さむきさいやく女形の不取娘青苔ハ衣ハ装身志とやく立役の朝朝駒を止平敵の景久カと角ハ荒る師の武藏坊丈と競女

伊達の大炊子水を塩神ハ多て九拜となり九ねとなりて室と誇る道家於あり男と選て轻重をあり怪重とありてトと定る世話あり奈須野の早智ハ後面ハおきと笑ひ安達原乃然歎ハ一夜難の漬やまきと恨む鹿島の神ハ夏装束の曲者と厭下邳ハおハ終失物の一卷と授く勢光ハ負て道りとりめ元章ハ弄て上使と偏ハお平よりくハ羊ハやつし李廣ハ射くハ虎ハ多代ハ東於門ハ樽とせり出せば勝ハ三番目ハ大浩と悟り武清縣ハ向の圃あれば馬氏ハ二の智の正存ハ載下れ勢光ハ多ハ春おてハ位の上人ハ多ハ影ハせぬきれハ水鉾ハ歳ハの教見世ハ給金のまらんるといのハ孫布川ハ並大名ハ庭ハ列り勢田川の餘坊ハ浪ハなづくハ餅ハ



大葉文庫

初編

三

跡^{あと}さすもれぬ地^ちまらうれ輔^{まろ}よ下^{しも}駄^だの歯^はれあご名^ななぐはき出^い一の
 鮠^{らう}よまをまろのどきふ系^{けい}疎^その蛤^{かき}の形^{かたち}弁^{べん}よわてうりきよは玉^{たま}れを
 もたえんとし一^{ひと}鱈^{たら}の肉^{にく}雪^{ゆき}れめくしきよまよ馬^まもねんとし
 町^{まち}抱^{かか}の文^{ぶん}簫^{しょう}新^{しん}造^{ぞう}の初^{はつ}輕^{けい}よ先^{まへ}たもて趨^{かへ}やうこれ真^{まこと}虎^こ文^{ぶん}倉^{くら}妓^ぎの
 鯨^{くじら}鯢^いよけをひてあむ牛^{うし}舌^{した}是^{こゝろ}を苦^くて屋^や店^{てん}の引^ひきといき海^{うみ}鯨^{くじら}
 舟^{ふね}と漕^こぐお店^{みせ}れ終^{はつ}よおぐ夕^{ゆふ}簪^{かんざし}蓼^{れう}酢^そよあじて居^ゐ疎^その汗^{あせ}を
 流^{なが}し一^{ひと}華^{はな}脩^{しゆ}情^{じやう}多^たと飲^のみ酔^よ碎^{さい}の腹^{はら}と摩^{あつ}文^{ぶん}伎^ぎの石^{いし}距^{きょ}千里^{せんり}の
 情^{じやう}を通^{とほ}じ一^{ひと}帯^{たい}間^{かん}の角^{かく}一^{ひと}角^{かく}れをとねらうまり方^{かた}れ亀^{かめ}の蓮^{れん}葉^{えつ}の墨^{すみ}
 れ物^{もの}と指^{さし}坊^{ぼう}之^の壳^{かき}の鮎^{あせ}見^みれ藤^{ふじ}花^{はな}と弄^{もよほ}ふ大^{おほ}一^{ひと}座^ざの海^{うみ}狗^{いぬ}狐^この尾^び
 とせられ三^{さん}弦^{げん}彈^{だん}の金^{かね}鯨^{くじら}魚^{いそ}猫^{ねこ}れ皮^{かわ}と敲^{たた}く声^{こゑ}妓^ぎの比^ひ目^め真^{まこと}に想^{おも}て坐^ま
 ぶをうせぎ多^{おほ}情^{じやう}の即^{すなはち}君^{きみ}子^こハ競^{きま}て廊^{らう}下^かとめぐる鳥^{とり}賊^{ぞく}の甲^{かぶつ}れ

學^{まな}ハ極^{ごく}子の裨^ひ壽^{じゆ}よ立^た葉^{えつ}櫻^{えい}れ莖^{かき}の石^{いし}ハ床^{とこ}のりれ基^{もと}盤^{ばん}よ上^{うへ}真^{まこと}尖^{せん}
 ハおあれ唇^{くちびる}と出して路^{ちよ}考^{かう}が危^{あや}色^{いろ}とつひいしきハ襦^{じゆ}襦^{じゆ}の鱗^{りん}を
 脱^{だつ}て朝^{あさ}の名^な代^{しろ}となす相^{あひま}方^{かた}よくたれ一^{ひと}石^{いし}決^{けつ}明^{めい}ハおり影^{かげ}をよ瀟^{しょう}瀟^{しょう}と
 穿^くれよあきとつきとらう詠^{えい}居^ゐれかき寄^よ居^ゐ虫^{むし}ハ吟^{ぎん}居^ゐまよあ
 りて身^みれまづきたるをこつ望^{のぞ}湖^{うみ}のほづれ飯^{いひ}ハ文^{ぶん}のたしと終^{はつ}
 て封^{ふう}んとし石^{いし}看^{かん}れ石^{いし}の莖^{かき}ハ蔓^{つた}のあつを終^{はつ}て掛^かんとし帯^{おび}晴^{はる}人^{ひと}と
 ついて鯉^い雲^{うみ}と暮^{くれ}しひ茶^{ちや}人^{ひと}形^{かたち}とほづて吵^{あせ}哄^{ほう}と思^{おも}ふ鯉^い魚^{いそ}乃^{なり}
 せしハおのく危^{あや}れ針^{はり}を死^しせ真^{まこと}眼^{がん}の不^ふ寐^{まい}香^{かう}ハおのく子^これ油^{あぶら}を
 つく秋^{あき}雀^{せき}海^{うみ}よ入^いて竹^{たけ}亭^{てい}よ埒^{らひ}ととも較^{かく}人^{ひと}珠^{たま}よほて玉^{たま}搦^なよ
 ぶとをよし見^み子^これ卷^{まき}ハ千人^{せんにん}の枕^{まくら}よ一^{ひと}河^か蛤^{かき}の舌^{した}ハ萬^{まん}客^{かく}の
 口^{くち}よなつて七夕^{せつし}おの星^{ほし}鯨^{くじら}ハ燒^や物^{もの}の裏^{うら}とくをとりなく花^{はな}

又をぐれの橋鯛ハ目れ色のうろろりやーふみねとくまて海鏡
 れ久しきと歎客怯と揺て空貝のあふたうと怒む。想のうま
 きは海をれさやまみどりあふをまわて膚の思ひるまま珠
 れまらうらまふとあふと妬心も面れ鏡鯛ニ子れ容とうへ一のの
 河豚百まれふとあやま言語のふはたふらう細とくうへ戻れ乃
 裏まて香ぐりき餅とまうく其細まふぐー。そのままらと
 うらまられ甘餅はなうと。其釣ハ香ぐあうれ此趣と楽も
 れハ人真とふ合して齡と延ハ此樂は弱くとのハ海笑は不會
 てふとくうらまらとん

地震説

常聞神代より一の大鯰あつて豊葦原中つふと載く其時く



必感あり。三弦世より多し。二百年もあらず。いふれども。名
 世は傳へず。若鮮はれと傳へず。人のなれど。たのむ。いふれども。感あり
 て。三弦塚と。江の島。女才天女の境内。建んる。を新し。年久し。も
 れども。子曳れ石ぶ。一人の力。また。よ。くも。あ。げ。され。せ。一。錢。と。積
 て。一切。花。経。を。ま。り。一。刀。と。揮。ひ。て。五。百。石。漢。と。刻。一。人。も。あ。ら。ず。の。と。紫
 檀。桂。棹。の。貴。賤。な。ら。ず。八。乳。四。乳。の。多。少。も。な。ら。ず。此。道。は。花。び。り
 人。を。れ。助。と。え。た。ら。ん。は。い。う。で。た。ら。ん。も。れ。あ。ら。ず。木。も。ぬ。く。を
 石。も。共。に。残。り。て。あ。り。て。は。人。を。年。な。ら。ず。の。え。き。は。傳。へ。ず。島。の。神
 れ。い。う。げ。と。あ。ら。ず。て。此。道。い。う。降。ら。ん。と。て。か。く。い。お。ひ。お。こ
 せ。い。う。と。あ。ら。ず。け。

雪日贈友人文并序

夜静し。て。冬。の。骨。と。抑。多。及。す。え。風。寒。く。し。て。獸。の。炭。を
 焚。煙。林。舞。ふ。瑞。雪。盈。尺。河。豚。倍。價。此。日。友。人。章。甚。小。お。し。

あり。哉。文。一。篇。と。傳。其。辭。よ。し。

紀。文。履。痕。と。い。ひ。て。大。門。と。鎮。夷。州。冷。艶。と。愛。し。て。提。灯。と。擲。成。政。中
 た。ん。だ。れ。捷。徑。と。い。ふ。り。業。不。牛。島。の。出。栖。と。訪。ふ。士。鉦。極。の。松。と。き。り。て
 甚。の。物。を。ほ。く。り。黃。門。將。衣。の。袖。を。拂。て。彩。曲。と。歌。ふ。これ。と。合。ふ。女。童。



石壁

初



石壁

初

乃拙と不選して親き人と集ると此此屏風として。麦葉末の枕
浅草より。都を臺まの好ぶの態あり。は法帖の世も稀なるも
金襴布と扱出さばいづこ。せむ。此屏風の世もあまわつてこれと
一及び実あまなうべし

堀川百首題狂歌集序 撰者狂歌生 鈍亭 芳葉亭

堀川百首の歌は巨房卿の撰きし。おまや。大にれ名を好んで世に流し
伝と揚ぐ人のいなる。おまに更ふ。いさむ。ひなま。これ道まふ。やま
出たれども。雄長老貞徳正式など。七心助のえ。川せき介れ。堀川にお
集つ。おまは。あう。たれ。と。此友川百首のま。く。そ。あ。を。わ。ふ。と。此ま
る。く。と。さ。大。は。戸。は。た。く。ん。上。ま。れ。ま。う。水。と。と。い。と。あ。く。く。捨。棄。の
あ。し。升。成。れ。ぬ。林田川の氷。あ。と。出。て。水。う。い。さ。ぎ。う。く。藍。染。川。れ。ぬ。

藍を出て藍よりくくく。さ。や。び。く。あ。と。く。う。り。て。水。道。れ。ぬ。ま。ま。ぬ
る。あ。り。り。堀。ぬ。ま。れ。水。ま。わ。く。く。く。ま。れ。外。に。戸。川。の。流。と。ま。た。ふ
あ。ま。ま。は。の。う。ぬ。ん。く。く。ま。れ。色。なる。河。の。ひ。と。を。び。ま。あ。る。年。れ。あ
ぶ。よ。も。ま。さ。り。歌。の。山。藍。は。漆。な。ま。ま。の。い。と。ま。ま。ま。浪。の。ま。ま。と。た。く
一。ぬ。べ。これ。を。ま。ま。や。河。岸。は。水。原。た。ち。一。翁。朱。硯。あ。と。漏。て。巴。を
画。き。お。ま。が。池。の。流。と。く。あ。る。ま。朱。筆。水。と。合。て。霞。と。引。つ。點。つ。あ。る
志。が。ぶ。川。の。あ。ま。ま。あ。る。も。お。ま。が。か。り。て。あ。れ。清。く。浪。の。も。や。さ。た。る
と。や。が。て。一。の。ま。ま。ま。ま。と。一。と。孫。川。百。首。狂。歌。集。と。り。此。三。の。水
流。あ。ひ。て。水。無。染。れ。流。う。く。び。清。く。冠。辭。の。櫻。と。流。入。ま。ま。と。れ。あ
た。し。き。ま。耳。あ。ま。の。ま。て。う。ろ。く。と。ま。ま。あ。や。鴨。緑。江。の。浪。う
た。お。ま。や。る。腸。の。綾。海。と。ま。ま。に。初。の。た。く。と。な。う。ま。八。眼。あ。ま。の



刀編

初編



刀編

初編

十六

歌ハ声色ありて画ハ才振し歌ハ実悪和実の強弱あり画ハ時代世話
此和漢ありこれと受けハ心楽しくこれと受けハ眼よりくぶ書画帖
も又一幕の小戯場なり

菊栗序 泉鴨菊園御導文

皇國こくは柔とめづるすけ延喜の帝れあこころそお香とよませま
う歌の書かきは又ええと久しより弘仁の帝これと賦うたし多し寛平乃
時此れと合せむいし根ざりの源々ればや子とせのほもたえざし
てとてあまづ人の多おほなる嘆出むむの久づるなるハ元祿の椿
ももすさうぬぐりわきて此あたりに此もよ名高きハいつややお
よぶされどあまこの花園よりあれまど又ぬ栗うら栗栗とと
て道のついでとひとりの紙よりついで訪ひ来まるとさび人

はまみはよこそさぐまは巢鴨の里は細おほと張りて利とりとめんといま
たふといあつとつとつとむぞおぬたちよとつて菅原長根が
り

盆画指南抄後序 春秋菴永女著

長根かといつおや光悦の翁ハ此道の仙ひんとしてとやされハ寛永十
四年よしかの春破画の龜かめは乗りて花の都はゆれしとやぬ若此とや
ぶと又もふよりうぶ春秋菴の翁ハ心とてなされた功いさとと愛あこ
れは洩たふんわぶとと付られよと今も仰り来まるとやぬと
いふよきん 翁おきなの七世ななよの孫菅原長根

五十人十首後序

歌と作つくハ家と造がぬしうた字文あざなの礎いしたるとも他言れ柱立

四方歌垣のぬし、むやく歌人の名ありて居たうら名はと知しつゝ、駿河
 町より富士は天窓をうら眺と歎き、土佐画は吉野の裁とておぼふと
 憾て百聞一見をえりて、いづへ今れ都の名取と捜す、古人稱る如者
 板は飾りありや否やと定んと、左の板をより旅をえりて春はとく
 此駒等用の玉遠の禰神の由とて、杖本は直と増し、るせ病時と
 えく干瓢の價貴はせりて、夕顔の美いとて、大なるころまで例の
 扱ふりしと、道なきころ通て、訪人と装りし、其歌垣の垣祝して、狂歌
 堂はせり、室は入人とて、まゝとて、やび人等、せちふりて、ぬし玉章
 の王瓜の赤きんと垣根の外は又なる人や、まゝとて、ぬし葉月ふるを、
 駿河は玉と限り人の駒と向られぬ、こゝ來んとて、やとやうた、都の
 旅の鹿をよまるとありけし、芝草は肉と載いつらん、きれ酒と土家

てこれと送るゝ、枕柱の景と慕ひ、新海苔の塵と望て、これと迎ふとて、
 十とめてとて、大塊玉斗れ米とて、これと胸は八斗の才あり、既種とけ、
 ちよとて、祝融千部の書と奪下、腹は萬巻抄あり、なんを荷
 物のまゝとて、長根何とて、俗人や、古人と送は徳あり、者ハ言とて、
 富者者ハ賤とて、長根不富して、且徳なり、とて、錢百そ乃狂
 歌と送て、言はれ、二役を充、そとて、扇巴、とて、盃はたこれ歌の
 源は流れ出さ、長根水遊むせ、は、やあり、今や玉は、底ふま
 大に戸の大なる、ねとて、あるは、度みせ、入れて、自浪と揚げ、あるは、身よと
 こそ、弱た、ふ者も、さ、その中、は、此、お、久、く、その、流と、数、書、を、河
 原、は、湛、て、支、流、四、方、は、ひ、ろ、う、き、水、歌、垣、は、あ、れ、う、ら、な、水、車
 と、造、れ、は、は、ま、り、り、加、減、よ、く、これと、茶、は、用、と、ハ、朝、の、花、香、を、體、の

ふらふらとひらひらとびらびらとけあふらふらと腸のきたあきも口はれはきふ
らどたたりきるるれば伊豆は千貫樋も此あといふんを駿河のあ部
川も此水と慕つたは常同諸の聲音は異つたは水よりてことふ
ら狂歌の風調も此あよりてことふであらぶき顔の水がりの用心とし
ていやく東へ帰していつよ

送卧龍園上京序

天保三年夏

天地のくまじや日月れ旅人逗留たなく公兩年ハ駄路のくまじより十あま
アるまけれど身ハ朝立弱のまじやうまて郭公待つころ名とあふらふとせ
井とさして向のむれ大江戸と出まれぬ外したる純翼とて老
る接気條と出せりといふべし

異國美人彈琴贊

三絃類美人爪長

家ハ蠶と不養して三の絲と弾き錦は花と織して五の爪長し

四睡贊

ふ生ハ應は合歡の精人抑れ盡ならん後身ハ必海獺とたり離枝と
なまべしといふくも揺り起せど前後も不知居睡るハ涼きま
の蓮池ハ弘誓の舟と漕まやあらん

賣茶の肖像贊

應賣茶舗某需

陸羽と異ふも羽なくいふんをて到人賣茶業と同くは林あを
まじやうまじやうまじやうまじやうの價とさめて名と海内は揚らん
今十一の利と扶けて福と此家ハ降まべし

芭蕉翁贊

長履の鈕と懸て長履の俳諧体と唱ハ斗れやといひだきて三石の奈

良茶を合ふ義仲と背を合せて後世肩をみづる者なり

黒木土賣

俳優の名は土賣、名をききあはあは、牛より色は黒木賣、此は
山木と都の花より、ぬ男はたえぬとあやしき

狐拳賛

狐よくひらり汝が名よりびて、猿人拳とも名を拳ともよび、これ
といふは、答ふは、汝や

鉄炮と名はあてさせたまふと祈やすうん三の垣

鯨魚賛

鹿島の石より、海と登り、ハ、汝も喜ぶ処あり、又平が瓢は背と撫る、
ハ、汝が喜ぶまじ、憂喜天より不降、又地より不涌、皆自招く、鯨と

美とあはれ、肉と蒲焼、もろもろたれ、亀と楽と、同く、尾と泥よ、
曳く

蛙賛 三蛙點茶

軍とやめて、於懼る長蛇の勢、茶と既て、長く、柴、臭鱗の形、
もろもろなとあり、て、古池のまき水とやると、らん

贈風吟園誌吟園辞

日光の山は二人のまじり、一人は羽族の長た、一人は池中の物、
あはれ、相ふみ、らく、秋、追く、雲と、夏、お、これと判者の列、ふか、
西、よ、く、時、既、た、れ、う、ら、ん

贈武隈菴柳菜子辞

武隈菴名、双樹柳菜子、名、茶、長、
う、ま、の、松、ひ、の、の、柳、蔭、ま、倚、人、さ、ら、れ、れ、と、末、者、の、度、ふ、ら、じ



て其名と世ふらびくせんとも室喉の花時中ふ先だちてひく日
とれたぐひはあじろ

僧繪園辞

名按明初号春友亭卧龍園社中

歌々み多宿と定て文みむひく木の栴あり色とも香とも知るよ
スセふやとてこれと判者れ中庭よりつー裁ぬ魁なりひくよ八重
咲れぬききこころりきれおりつよ此花外一た龍のた孫なれを潜
てゆと行ふづー

贈賣茶園辞

名浦志保西来居一号瓢尊園社中尾州人

故西来居のあはひふ歌の仙とて子さるる中よ賣茶園のぬよ
く其道と付つて歌巧りて短冊のやる駕術とえはしバ雅名天
とよ花りまよ足れ乾り瓢千里れ弱と出きりいさ

贈五子辞 桂亭花源楼 栗花園八千代庵 洛葉庵

五人拵の囃子方ひふ歌あ遊り年あり、うたぬ鼓吹ぬ笛とせよ
吹きやうり、判者あかて毛糧の上よらむ、碓子れ干菓子、錦たて
腹の中ともアセやとけり、うらみあけ

贈狂歌堂小祥忌辞

計無月ら、梅松の樓よとて、侘諧歌場のるお、松のぬく、栴梁の枝し
て、その摧けも根は、梅よ不月、群芳れ料た、ふ得して、後、残せり
幸しやいん、不世しやいん、此日人、共、蓮の歌とよみて、おの、冥
と、扇めぬ

くちろく、詞の玉とねとて、わきて、涼き、思と、うけん

贈鈍く亭大祥忌辞

鈍く亭れ翁の三めぐりは忌日、人、とて、卯花の歌と、け、卯月、八、うら
とけ、うまれ、うた、な、さ、た、ぬ、れ、あ、え、ほ、ち、う、帰、ま、来、ま、さ、ぬ、と、い、せ、ん
う、は、む、と、い、や、ま、さ、い、と、わ、と、け、を、た、ぬ、の、あ、り、と、い、う、わ、あ、

悼西来居辞 名未佛初号瓢草園可法師

鈍く亭、觸た鼓の音絶、四方、の樹の横綱、字の力強、うしも、老の病、よ
勝、う、く、様、田、の、扇、の、風、を、散、り、浅、艸、を、徒、の、玉、を、帰、れ、り、東、来、白、毛、の、力
すも、極、楽、の、貝、次、負、は、う、う、し、と、い、せ、ん、斯、胸、つ、づ、く、る、れ、を、さ、な、し、中
又、分、て、此、主、の、狂、歌、角、紙、の、番、附、を、幕、内、と、む、く、う、た、く、山、の、こ、は、取、え、し
と、若、さ、さ、妻、と、さ、あ、さ、兒、と、引、分、り、て、西、の、う、や、ふ、の、う、て、後、又、来、る、う、あ
き、い、と、い、と、い、い、ん、と、い、な、し、あ、ま、ん、の、此、ご、ら、お、ん、と、と、歎、れ、し、う、
し、い、と、い、と、い、と、い、や、あ、り、ま、ん

猶よとておきてなき人々もわれはかろくれぬるまはせし

後平秩菴東作碑 在六阿路陀才一

後平秩菴東作氏ハ鈴木名ハ光村武蔵國豊島郡大島村紀州明神
此初年と享子り六十八文政八年八月廿日卒翁多能みして石とほ
ぬのりたつて寛運し金の枕とありてく絲と採のぬらふハ橋が象の
捨と奪つて水筆と揮ハ雲と紀して龍の跳る勢あり竹刀哉
舞せば風を生じて虎と撃は氣ありわきまはな歌よ心とむ
り深くしとくこれ石よひくをれ歌とるうておぬ名とほのせ
然るもろくも斯はくり出せハ其菴は遊び一人このいさをそ
ありけ

尾上梅幸碑 在本所押上大雲寺

今ハ尾上梅幸ハ初縁の男ハ藝名松よ小月て子載小傳ハ竹田枕と割
ていも測りて怨灵の奇巧不及と愧姿色櫻はめく一世を壁に
豊因筆と揮れは字と採て清女が妙言不虛とた進上の引幕花と
饒て舞臺春は色と添見貞の帽子雪と戴て浅秋の波と揺れ
書と善し音と識れりわきと拵と種よ長ざり索駝跡と慕んて
我々孫の屈しと歎き政武塵と取んて子か鬘の無と憾む才と
色と全く備はり為時ぬるんせんあしうらば女もくもくぬり
やぬるも今年又の師ありしおは梅幸てふ人の名もこれ石と
此寺に建て自は法の名とて鑄せハ龍衣ハ名の朽せしんを
謀り思は重きと不忘故な

遊十楽亭記 在加洲金沢屋川

戊辰は孟秋金沢の府城と出て屏川の南におぼしむ酒樓を登り蟬髻の
 阿唯と噂なく夢奴の伊也阿と應るあり魚住めと水清く日お曝し
 石白し数百年は朽木天道次第の流るれも高と取て人の下はめく文橋
 此往來已随ふよあめども締とびて人と敷茶がめし松老く卯辰山の頭元
 樹をくくして小立野に額青し鈍子は鶴来の酒と流れば長帯うつぎ
 亭とれ気持と巻め小蓋よ蒸具と盛れば親に客厨人の片思と談る
 吸物の赤貝白お菊の浪と漂ひ茶碗の青踏黒蒸姑の蔭は隠る
 海參のる館の鞋とまゝして肉づく肥年魚ハお背油の羅と被て休更
 瘦ぬ松草は登りきしと惜ふ小魚の翅をぶめとあられむ浅井川の
 抱石は彼自口と塞き羽咋郡の鰻鱺ハ人皆喉と鼓と今迄跳宮の
 腰の鯛再び潮者よ鱸れ先と揺し朝と躍し粟崎の鯛又

魚生は浪の花と咲せたり長根後末酒をまるといふが酒宴を愛し言
 小訥なう議論と好む左のよ小盃と奉て酒未だ右れ指お魚餌と撮
 て板空く残る蠟燭と接て葭蘆と巻き亭と喚て家号と問て
 巻よ十樂亭と以も長根の両刀の威とつて四民の上座一人は
 とせられて萬人は肘と張り大なる家は住めど晦日れ未と不懼マ之
 と養下采櫃の空と不知弓術不神しく勢飛をと墮し乗馬不龍
 して名千里の駈せ山は入て獸と獲ハ忽肉れ山と築き淵は沈て刺
 ば俄は血の池と穿肉陣お臨て鷄卵酒の援とふ女兵と操て地黄丸
 の下策と不用ハ世は立て志と逞し者れ樂し吉野は好んで始て花中れ
 王は尊と知り富士は登て曾日本の鼻は高きと登び一盃の濁酒と不
 携して越路の者よあくがれ八角の眼鏡と不懸し田舎れ月と眺

め、橋立よ造物者れ琴の音と聞き、松島よ放下師のまげと知り、一葉は
舟に棹さして身蛇又似たれども、網と張りて利と射るよ不巧、数丈の岩
に鎖と懸て體猿に似れども、藝と售て食と求む心なく、鐵鞋と穿て、
白銀の砂と踏み、襪褌と着て錦繡の林と分る人あまげて身と縦ます
若れ樂し、蕭と吹て鳳凰の赤色とつら、書と讀て聖賢の身振とぞ、
盤と棚へ上げて、錢の名と不言、唐卓と接し居て鼻と香れ、煙ふ不動
四本懸は胡粉仕立の革と蹴、三三をまは松葉菖黄の湯と啜り、華は其昌の
雙文鈎と塗て、画は事類の壁人と字し、萬葉と唱て青育千人と并り
四つとつりて明眼千人は術よ、伎よ誇て名と好む者れ樂し、馬の爪と
踏て敵寇の甲と歎む、頭上の光と浴れ、白粉と悪て嬌紅と愛する、面皮の
よ、よとつりて、衣は百里先の水は濡れど心は濡れぬ、一たびもよと通る

なう、帯は数十頭の龍と織れど眼よと申されど、やうび腰よと申するも
閑帳の朝参よいらん、く天竺れ才と称し、涼舟の夜行よいらん、く夜光のまを
畚言む、祭旗よ招れ、ま摺進て身万度れむ、く、戯場よ指は毛種よと
たれて自願えせの名小應し、花は群集行厨と食ても、是が為、味と不知
縁日れ鉢植花楓とふれども、是が為、色香と夫の貌と移して衆と惑し
者れ樂し、夕顔柳の下は涼て、二布おくるも、たを不愧、芍薬菴の蔭よ
眠て衣よれ、露けきと不厭、狂言れ役割家系と論し、氏神の祭禮村搦と
正と、益と傾て男と顧、ハ植す、心の水は揺る、く、馬と勝て婦と迎、つらハ
麦細よ思の種と時、く、く、三日正月三百は限んや、于南盆踊、今明れあらんや
肩よ、袂と擔て、徐く、く、く、指の濁と飲、足と遮、く、伸して、悠然、く、く、く、俵の山よ
對ハ、鄙よ看て、心と安、く、く、者れ樂し、水は谷川よ汲て、井と改、の費なく、薪の枯枝と

折て分と揮の芳なり。養老の酒と飲はるれば書出—いつのせうもあつて
長生れ薬と菊よりいれぬ。華代誰がとくも。贈人著菘と穿て鰻籠の
者ときこめは。落栗と拾して球餅の美と不羨あたしき。菌と採れば銅
青は錆いつこようある。嫩き蕨と折むも濃紫の色もよきなり。頰たる松
風は外二度強と不す。皓たる山月のおよ。終方鏡とふん。山は住て周ふ
る。ちりり者れ楽。緑亀代釣れ。詭言結納と語り。人魚と食。仙人干鱈
とき。夕汲と婚て女浪男浪の往來去け。潜水別て巖と鰈魚の盟約堅し。
七郷一はとと競ふ。鯨のふねと。一細万金と拳。鯉の聚き。熊野の浦は
熊の皮と不敷。餅と食ひ。鉾子の後。純子と不用。酒と砂。油われば
いつも新き。夢より座。浪荒れも常。盛なり。むとん。海は臨て生と過。者
は樂。口は粥と食ひて。倉より米と積。丸より火と燃。て。国は煙と消。新田と

發て金の生る本と植銅山と穿て銭の涌く泉と。久新吉原の花の種代
越後のふ。尋ね道頓堀の金ね蔓と。徳丈の高。搜。婦と娶や。痘斑の多
少と不諭。荷物の多。女と論。友と交る也。才学も富と不擇。て。子代
富ると擇び。烏金の催。促は故。みく。と不厭。富れの方。金夢。故奪。と不
覺。利。小。騎。て。俗。と。乱。る。者。れ。樂。花。嬢。と。慕。ひ。て。勝。山。の。鬘。首。と。纏。り。民。な。る。と
不悟。声。妓。と。愛。して。象牙。れ。撥。性。と。代。る。芥。子。と。事。と。不。顧。新。道。の。別。房。
出。格。子。の。新。き。と。迎。む。狸。の。寡。婦。小。夜。衣。れ。回。き。と。え。お。ひ。出。女。と。選。て。上。は。く。な。る。
あ。ま。高。く。乳。母。と。親。と。憎。み。な。る。見。と。抱。き。綿。帽子。の。雪。れ。膚。と。會。式。の。女。忍。び。
箱。入。娘。の。月。は。顔。と。傳。講。の。曉。な。る。と。嬰。妾。よ。あ。さ。つ。き。鈴。の。別。と。を。と。今。事。あ。ま
河。豚。汁。の。聲。と。流。く。色。と。尚。て。命。と。綿。者。れ。樂。之。飯。は。白。く。して。犬。の。牙。は。ぬ。く。茶。は
細。り。て。鷹。爪。の。ぬ。く。玉。と。碎。き。白。銀。と。型。一。鈴。木。の。銚。浅。と。齒。方。金。と。食。る。紅

天保五年甲午六月

武隈庵雙樹
護心亭三猿
校正

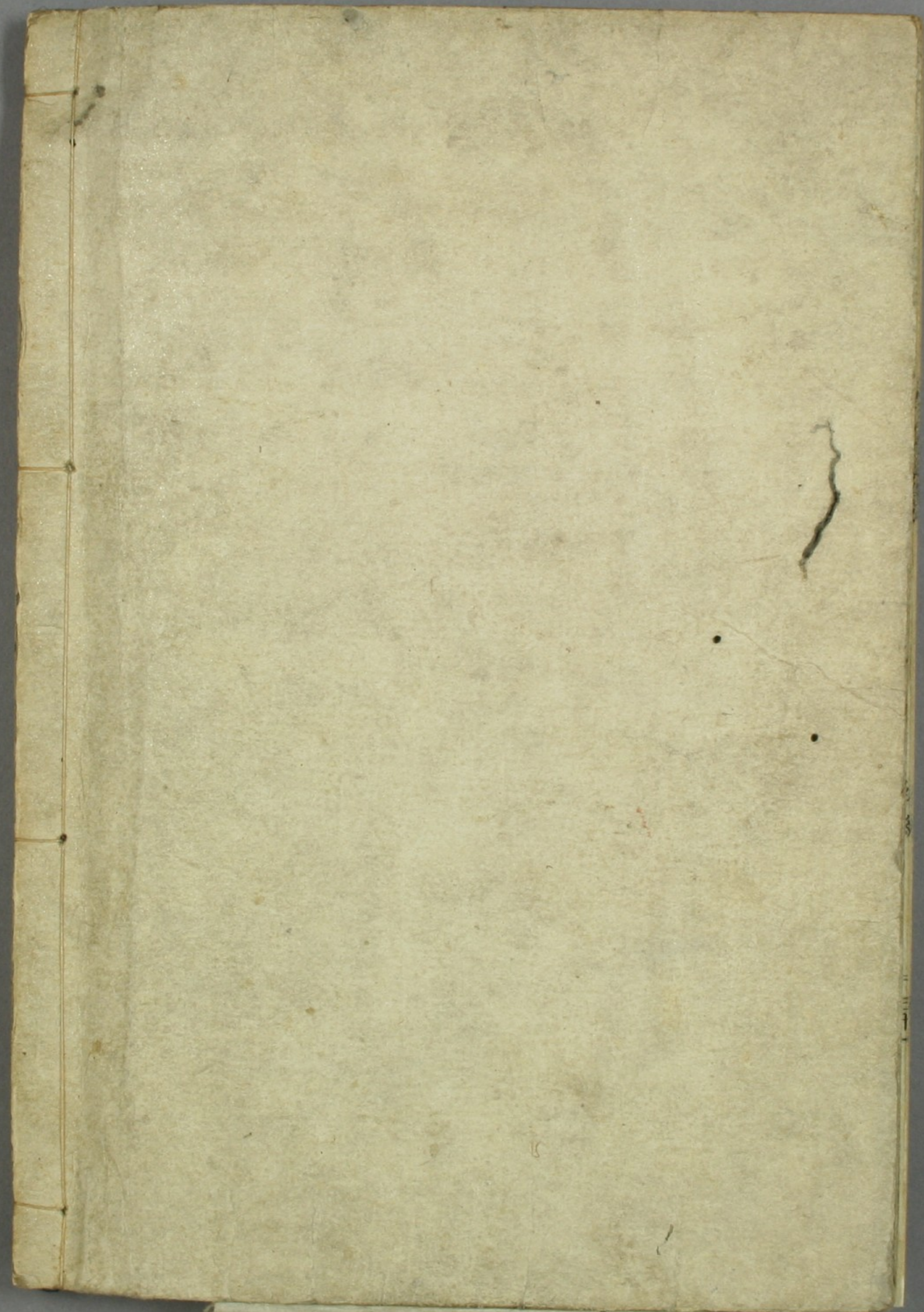
栗花園總長藏板

芍藥亭文集

二篇

近刻





藥考文彙